幼稚園の中の未就園児クラス　たんぽぽ組

大沢　啓子

幼稚園で遊ぶ未就園児

私の受け持ちのクラスは、東京都目黒区、私立駒場幼稚園の未就園児クラス、たんぽぽ組。幼稚園入園前の二歳をすぎた子が対象で、お母さんと一緒に遊んだり、お母さんから離れて保育者や友だちと遊ぶ、十人程の小さなクラスです。月曜から金曜の各曜日十名（後期は十二名）の登録制で、朝九時十五分から十一時三十分までの二時間余り、室内や園庭で遊びます。みんなそれぞれ思い思いに遊びますが、ホールや園庭で遊ぶ時は大人の目が行き届かず危険なこともありうるので、子どもたちがあまりちらばらないようにみんなをさそって遊ぶことを心がけています。

たんぽぽ組は様々な理由でこのクラスを必要として

いるお母さんと子どもたちで成り立っています。近所に同年代の子どもがいなくて遊び相手を求めて、また、子育てに悩み相談相手・話し相手を求めてくる若いお母さん。児童館など屋内施設と違って、外遊びもできる幼稚園の環境が魅力という人。学生ママやお母さん自身の勉強のため、数時間でも子どもを預かってほしい人。下の子が生まれてなかなか思うように相手をしてあげられなかったり、お産で孫を預かったおばあちゃんが一緒にきていたこともありました。また、言葉などの発達の遅れがあり親も子もたくさんの人とふれあう必要のある人や、入園準備のため幼稚園の経験を少しさせたいと考えているお母さんもいるわけで、十人いれば全員それぞれに入会の理由が異なっているのです。

子どもたちは登園すると部屋一杯におもちゃを広げて思い思いの遊びをします。メンバーがそろって遊びが一段落つくと、場所を変えてみんなで外にでて遊びます。まだ一人遊びや大人との関係で遊んでいる子が殆どですが、幼いなりに遊びの世界が展開しています。子どもたちはお母さんや保育者と一緒にゆったりと安心した世界がもてるように、またお母さんには他の子との関係の中で自分の子の育ちを感じてほしいと思っています。幼稚園の中で落ちついて子どもとつきあっていると新しい発見がたくさんあるのです。

そして子どもたちが、幼稚園という場や私たち保育者に慣れ、お母さんがいなくても不安なくすごすことができるようになると、家事をしに家に帰ったり、病院や美容院など子連れでは行きにくい用事をすませてきたりなど、上手に自分の時間を作っているお母さんもいます。

たんぽぽ組の発足から現在まで

そもそもこのたんぽぽ組ができたきっかけは、あるお母さんの相談からでした。平成八年一月半ば、四月

から入園予定の子どもたちにむけて、三月までの約二か月間、幼稚園に慣れるため週に二回、慣らし保育のお誘いをしたところ、十数名の親子から希望の申し入れがありました。ところがその時に、その子たちといつも一緒に遊んでいた一学年下の子たちが、おいてきぼりにされた状態になってしまったのです。月齢ではそう違わないのに、学年が違うということで切り離されてしまったのです。困ったお母さんが園長先生に相談したところ、そういうことならとその子たちも一緒に遊びにくることになりました。そのお母さんたちから話を聞くうち、実はお父さんが入院していて……という話などもでてきて、いろいろな事情で入園前から幼稚園を必要としている家庭がこの地域にもあるということがわかり、新年度から本格的に未就園児クラスを設けることになったのです。

平成八年度は五月から週二回、新しい子を交えての保育も始まり、六月からはスタッフも増員しすぐに週四回にふえました。幼稚園側の設定した火・金曜日だけでは曜日の関係で来たくても来られない人がいたからです。木曜日は地域の児童館で幼児教室を開催しているため必要度は低いということで、とりあえず一学期は月・水曜日も開設すると評判は口コミで地域に広がり、二学期からは木曜日も始めることになりました。

平成九年度はまた様子が変わりました。幼稚園の在園児数が増え空き教室がなくなってしまったのです。急遽、職員室を移してそこをたんぽぽ組の保育室にあてました。前の年まで使っていた部屋の半分ほどの広さしかありません。その部屋で定員六名で始まったのですが、やはり希望者が増え二学期からは十名になりました。なかには二歳の誕生日を迎えたばかりの小さい子たちや、お母さんが勉強を始めたのでその時間を確保するために毎日くるという子もいて、狭い室内ではありましたが、それぞれ自分の世界を確保できる遊

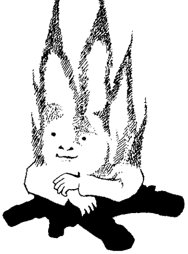
びがくり広げられていました。

平成十年度になると仕事をもったお母さんが相談にみえました。〝今は休んでいるが、子どもが安心してすごせる場があれば預けて週に数回、短時間でも仕事を再開したい。将来は保育園ではなく幼稚園に行かせたいと思っている〟ということで、預かり保育との関係もあり、ますますたんぽぽ組の必要性が感じられる年となってきたのです。

そして四年目を迎えた今年の四月、平成十一年度前期（五～九月）の入会申込みを募集したところ、受付初日で殆どの曜日が定員の十名に達してしまうという事態になりました。これはどういうことなのだろうと私たちスタッフも驚いて申込書を見てみると初めての子が目立ちます。在園児・卒園児の弟妹はあまりいません。電車で二駅先の、乳幼児の預かりを専門としていたベビールームが閉鎖になったことと関係があったのかもしれません。

幼稚園の評判は口コミで地域のお母さんたちに広がり、見学に見える方がたえません。現在、定員がいっぱいになってしまったため空き待ちをしていただいています。いろいろな事情でたんぽぽ組を必要とされている方のためになるべくお断りしなくてもすむように努力をしてきたつもりですが、施設の問題、定員の問題は私どもスタッフも頭がいたいところです。保育室の広さは限界なので設備を工夫したり、専用のベランダを増築する事になり、夏休みを利用して大工事が始まります。これで十月からの後期には保育スペースも少し広くなり定員も十二名に増やせます。この原稿を書いている時点では後期の申込み状況がどうなるかはまだわかりませんが、お断りはしないですんでほしいと願っています。

少子化といわれる



現在、幼稚園は選ぶ側から選ばれる側に変化していま す。そして家庭にいる母子は悩みや希望を受けとめてくれる場所をさがしているのです。幼稚園が何をすべきかが求められているのです。

幼稚園の中のたんぽぽ組の位置

幼稚園の中に小さな子たちが遊びにきているということは、在園児にとっても大きな意味があります。在園児たちにとってたんぽぽ組は、幼稚園の中でも他のクラスとはちょっと違う特別区域に思われているようです。まずおもちゃが違います。パトカーや自動車・新幹線などミニカーがたくさんあります。そして部屋の半分は畳が敷いてあり冬には炬燵も用意されます。途中におやつもでます。幼稚園というよりも家庭のようで、とてもくつろげる部屋になっているのです。

時々自分のクラスで身のおき場のなくなった子の避難場所になることもあります。彼らには何か心がおちつく部屋のようです。どの子も勝手気ままに振るまうようなことはありません。自分たちより小さい子の部屋なのでやさしい気持ちで接してくれるようです。年少組などは月齢ではそれ程違わないのですが、意識の中には大きな違いがあるようです。まして年中や年長組は余裕をもってこの小さい子たちを暖かく見守ってくれているのです。つまり、たんぽぽ組の存在は、そこにきている母と子を支えているだけでなく、幼稚園全体の子どもたちの成長をも支えていると考えられるのです。

子どもの発達と子育てを支える

長々とたんぽぽ組の現状を書いてきましたが、年々必要度の高まるこのクラスを、この先どう考えていったらよいのか悩むところです。幼稚園での子育て支援への行政の取り組みはまだまだのようで、実際、幼稚園の施設を使って保育園を始めたり、動きだした幼稚

園への補助金を予算化している自治体もありますが、地域の実態を把握していない自治体も多く、対応はばらばらです。

預かるばかりが支援ではないというご批判をいただいたこともありましたが、駒場幼稚園には親や地域の必要性や幼稚園の努力でここまできたという実績があります。自分から仲間を作ったり行動を起こしたりできる人たちはまだいいのです。もっと単純に、迷い道に迷い込んで困り果てている母と子がたくさんいるのです。どうしようもなくなり何とかならないかと重い口をあけた若い母親たちの声は聞いてあげなくてはなりません。少子化の波の中で一緒に言葉を交わす仲間もなく、あふれる育児雑誌の情報に迷い、自分以外わが子を見守る大人のいない家庭状況の中で子育てに大きな責任と重圧を感じながら子どもと向かい合って困っている母親を支え、小さな声を拾っていく。そのことが幼い子どもたちの健全な成長をも支えていくことになるのです。そんな役割は幼稚園だからこそできるのではないでしょうか。施設の有効利用や、園児の確保という園側の都合だけでなく、子育て世代とこれからの子どもたちを支えるために、窓口を開いていたいと思います。

しかし、このことは一幼稚園の努力で解決できるものではありません。うわさを聞いて遠くからわざわざ電車に乗ってくる親子もいるということは、近くに受け入れてくれる幼稚園がないということなのでしょう。ご近所の幼稚園がもっと自然に地域の子育てを受け入れるようになれば、一か所に集中することもなくなるでしょう。そのためにも現状のように一部の幼稚園の努力に頼るばかりでなく、自治体も実態をよく把握し、みんなで子育てに取り組んでいきたいものです。

（駒場幼稚園）

☆ 九月号六頁上段十五行目の「決定」は「決実」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。